

---

○議長（齊藤 重君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前10時45分）

---

◇ 高 柳 孝 博 君

○議長（齊藤 重君） 一般質問を続けます。

通告順位2番、高柳孝博君。

（5番 高柳孝博君 登壇）

○5番（高柳孝博君） 通告に従いまして、壇上から質問をいたします。

先般、内閣府の南海トラフ巨大地震の被害想定が発表されました。また、2011年の3月11日の東北関東の大震災から1年半を経て、その後、町がどのような動きをしてきたか。

まず、1点、安心・安全な町に向けた防災の取り組みの考え方についてであります。

現在、防災計画の見直しがどのように進められているかであります。

もう1点は、行政に住民参加の仕組みづくりについてであります。一つは、避難タワーの建設の関係であるとか、そういった住民からの問い合わせが来ています。そういったことに対して情報を発信するだけではなく、受信がどのようにされているのか、あるいは、住民からの声に対してどのようにフィードバックされているかであります。

2つ目は、第5次総合計画の策定が今なされているわけですが、住民への説明会はなされるのか。また、住民の意見をどのように取り入れていくのか、そして、一つは、アンケートを取りましたけれども、住民の声に基づく方針もあるでしょう。一方で、10年後を見据えた町の方針というものもあると思います。そのあたりが現在どのように考えられているのかについてお尋ねします。あとは一問一答で実施したいと思います。

以上で壇上の質問を終わります。

○町長（齋藤文彦君） 高柳孝博議員の一般質問にお答えします。

1. 安全・安心の町に向けた防災の取り組みの考え方は。①現在、防災計画の見直しはどのように進められているのか。「(1) 避難所の見直しの必要性は」についてであります。

去る8月29日に、南海トラフ巨大地震による津波高の10メートルメッシュが公表され、松崎町での最高は、雲見集落外の南西側の外海で16メートルとされました。この数値は、現在の避難地が決められた静岡県第3次地震被害想定津波高、6.0メートルを大きく上回っていること、また、今回は津波の浸水深が地点毎に示されました。

これらのデータを各自主防会長である区長様へと示し、各区の状況に応じた見直しが今後必要であると考えております。

(2)「那賀川水系河口周辺治水対策委員会の答申を受けて水門建設の考え方は」についてであります。

8月28日、治水対策委員長から答申書をいただきましたが、委員の皆様が長い時間をかけて、熱心な議論を重ねてまとめた、非常に重みのある答申であると受け止めています。

町民の生命と財産を守ることは、町長としての責務であると認識しております。答申の中にあるように、「津波からいかに逃げるのか」という意識付けや、避難路整備や避難タワーの建設等ソフト対策の充実とともに、この美しい松崎の町並みや町民、公共の財産を守るためのハード対策もしっかりと進め、ソフト対策とハード対策を組み合わせ、多重防御による減災を図らなければならないと考えております。

水門建設は、10年以上の長きにわたり、町の懸案事項となっていた大きな課題であります。現在、静岡県では第4次地震被害想定の見直しを進めており、津波対策の充実の検討も行っていきますので、議員の皆様のご理解を得て、区長の皆様にも十分説明したうえで、水門の建設を静岡県にお願いして参りたいと考えております。

(3)「役場が被災したときの復旧・復興計画は」についてであります。

被災の程度によって、対応が異なって来ますけれども、最悪のパターンとして、役場機能が全損した場合のIT機器にあるデータの復旧が、急務となると思われれます。町では、住基システム、税務情報システムなど14の個別システムを、県外の保管場所へと30分おきに更新し、保存しております。この復旧にはサーバ等の機器が必要となってまいります。機器の調達ができれば早期の復旧が可能であると考えております。

また、日頃業務として扱っているファイルサーバについては、1週間ごとの更新保存に向け、現在検討中で、復旧活動に支障の無いよう努めて参りたいと考えております。

更に、以前から議員の指摘をいただいております業務継続計画につきましては、現在「松崎町地震・津波対策検討会議」の庁内会議で検討を進めているところでございます。

(4)「観光客に対する防災対策の取り組みは。誘導標識など[見える化]への取り組みは」についてであります。

観光を基幹産業とする当町では、地震発生時に相当数の観光客が滞在していることも考えられ、その対策を講ずることは、安全、安心な観光地づくりに向け、何より重要なことであり、地域、観光関係者と連携した取り組みが必要となります。

施設内の地震対策をはじめ、地震発生後における地域住民と連携した避難誘導體制の確立、適切な被害情報発信、また、すぐに帰宅できない観光客に対する避難所における滞在支援や、安全に帰宅ができるような帰宅支援をしてまいりたいと考えております。

また、本年度において、三浦地区では津波避難地区への誘導標識を各自主防で設置いたしました。

松崎地区では、避難先、避難ビル、広域避難地等多くの標識が必要となるものと思われまので、各自主防会長と相談しながら、観光地でもあることからイメージを損なわないよう配慮して対処して参りたいと考えております。

2. 行政に住民参加の仕組みづくりについて。①「避難タワー建設の問い合わせがあるが、町民への情報発信や意見収集が不十分ではないか。メールや電話などにより行政へ寄せられる意見の状況は」についてであります。

避難タワー建設に係る要請のメール、電話等については、議員が言われるように当方からの情報発信が少ないためなのか、8月末では寄せられていませんでしたが、9月1日の防災訓練において、8月29日に南海トラフ巨大地震の10メートルメッシュの公表により、これまでの漠然とした数値に比べまして現実的なデータが公表されたことからか、避難タワー、避難路の整備等の要望などが、情報連絡員を通して寄せられました。今回公表されたデータは、各自主防会長へと送付させていただいております。また、今月の区長会では、データの説明を予定しております。

避難タワーの建設、避難路等のハード整備には地域住民の皆さまの協力が必要不可欠であると思っておりますので、地域との連携を密にして対応して参りたいと思います。

②「第5次総合計画策定に向けて住民への説明会を開く予定は。町民アンケートを総合計画にどのように活かしていくのか。また、10年を見すえた町の姿をどのように考えるかについてであります。

町では、平成25年度から平成34年度までを計画期間とする「第5次総合計画」の策定を進めており、これまで庁内会議や町民意識調査、団体等へのヒアリング、ワークショップ、総合計画委員会などを開催してまいりました。

将来像を掲げ政策を方向付ける「基本構想(案)」が固まり、現在、施策を定める「基本計画(案)」について庁内会議で検討を重ねております。

ご質問の住民の説明会につきましては、「基本計画(案)」が固まった段階で、地区懇談会を開催する予定となっております。

「第5次総合計画」の策定にあたっては、平成23年度に、18歳以上の町民1500人を対象に、町民意識調査を実施、685件の回答をいただきました。調査では、住みやすさと定住志向、まちづくりへの参加意向、施策への満足度・重要度、行政の取り組みに対する満足度、今後の方向性についてご回答いただきました。

特に目指す方向性として、「活力・にぎわい」、「安心・安全」、「自然の豊かさ」、「心の豊かさ」が多く上げられ、これらを総合計画の中に反映してまいります。

今回の総合計画では、町全体が一体となって進めるまちづくり、安全・安心に暮らせるまちづくり、松崎町の資源を活用するまちづくりを基本理念として、10年後の町の目指す将来像は、「一人ひとりが主役となり、活力とやすらぎと感動のあるまち」としております。

以上でございます。

○5番（高柳孝博君） 一問一答でお願いします。

○議長（齊藤 重君） 許可いたします。

○5番（高柳孝博君） まず、現在の防災計画の見直しがどのように進められているかということですが、一つは、避難所の見直しの必要性。先ほど今後必要があるというふうにご回答をいただきましたが、想定も出るでしょうが、想定だけではなくて現在の避難所が本当にいいのかということをお考えなくはいけないと思います。

まず、1点は、先般の防災訓練の時にも高齢者が避難ビルあるいは避難タワーのところに逃げました。ところが、上に上がることはできませんでしたという話が出ています。となると、避難タワーを作っても避難ビルがあっても逃げられない人がたくさんいるということです。そのあたりを考えた避難所づくりということをしていかなければいけないと思います。そのあたりはいかがでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） それは非常に難しい問題だと思っています。なかなか身体に障害を持つ人を全部助けるというのは、考えると非常に難しい問題だと思いますけれど、いろいろこれから検討していく必要があると思っています。

○5番（高柳孝博君） 高齢者に聞きますと、よく聞かれるのが、「もう私は80歳だからいいよ」とか、あるいは、「もう家にいるからいいよ」とかということが聞かれるわけです。ところが、それでいいんでしょうか。私は命に変わりはないと思っています。そのあたりの考え方はいかがでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） そのとおりだと思うわけですが、やっぱり高知の方では救命艇とか、いろいろライフジャケット等とかを考えているそうですけれども、そのようなことを考え

るとやっぱりそのようなことも考えなければいけないのかなと思っています。

○5番（高柳孝博君）　いま防災、津波対策用救命艇ですかね。それと救命胴衣の話が出てきましたけれど、もちろん避難所そのものはやはり逃げる有効な手段だと思いますが、その補完として、近くに、あるいは介護施設のようなところであるとか、そういう老人がいるようなところ、例えば、避難所を作ったとしても、その避難所に果たして何人が来られるかということを考えなくてはいけないと思いますが、そのあたりはいかがでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　第3次被害想定の際に、東区・西区・南区・北区・中区・江奈3・4・道部・宮内と、この931世帯、2354人、これは23年7月の数ですけれども、このようなことがあって、このような人が今度の被害想定になると全部逃げなければいけないわけで、発生する時期によっていろいろ違うわけですけれども、これ以外に範囲が広がるわけですから、本当に考えていかなければいかんかなと思っています。

ただ、避難ビルの高さとか、今度最大浸水深が出たわけですけれども、環境改善センターがGL11.51メートル、海拔では13.5メートルで、最大浸水が4.5メートルと、まつぎ荘も高さが20.25メートルあって、最大浸水が4.8メートル。それで、松崎小学校が屋上12.97メートル、最大浸水深3.7メートル、松崎中学校の屋上11.15メートル、最大浸水深3.1メートル、福祉センターの方も屋上7.6メートル、最大浸水深4.0メートルということですので、今の避難所でそれなりのことは対応できると思うわけですけれども、これから本当に地域の皆さんともう一度ちゃんとしていきたいなと私は思っています。

NHKの「釜石の奇跡、命を守った子どもたち」が放映されて、非常に感動したわけですが、その中でやっぱり私はいろいろ避難とか何とかいろいろあるわけですが、最後はやっぱり自分の命は自分で守ると、地域の命は地域で守る、家族の命は家族で守ると、震災が復旧したら3日間くらいの食料は全部自分たちで用意しているよと、このような心構えがないとなかなかいかないかなと思っています。

それで、釜石小学校の皆さんがハザードマップを作ったのがものすごく効いて、防災教育や地域を守るというようなことが放映されたわけですが、その時にやっぱり地域の皆さんも役場からハザードマップを配られたら、「ああ、こんなもんか」と言うんじゃないで、地域の皆さんが参加して自分の頭の中にちゃんとその地域のことを入れなければいかんかなと、これを私は基本方針にしていろいろやっていきたいなと思っています。

○5番（高柳孝博君）　地域で守るといふ共助と自助、自分でももちろん守らなければいけないわけですが、その共助というのが、訓練とか何とかをやればやるほど難しいというのが、考える

と現状だと思います。

そして、もう一つ、津波で言われているのが、「避難はてんでんこ」という言葉がありましたね。ですから、てんでんこに逃げないと助けに行った人が巻き込まれてしまう。そういうことも充分現実には東北・関東の震災では、助けに行った人が亡くなっているという現状があるわけですね。そういうことを考えてみると、一人ひとりが逃げられる手段といったものを考えないと不安はぬぐえないのではないのでしょうか。いかがでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） 本当はそのとおりだと思うわけですがけれども、これがなかなかできるのは、なかなか難しいと思うわけですがけれども、先ほど申したとおり、防災教育が地域を守るといことで、やはり防災教育ということをやちゃんと徹底していかなければいかんなど、そして、避難訓練ですね。東北の方に私も2回行きましたけれども、やっぱり訓練の回数を重ねているところが人が助かったと言っていますけれども、地味ですがけれども、避難ビル、避難タワーという前に防災教育と避難訓練というのを徹底してやっていかなければいけないなと思っていますところでございます。

○5番（高柳孝博君） 防災訓練にその意識を高めるということは非常に大事だと思います。というのは、防災訓練の時にも「私はいいよ」と言う方が訓練に実際に出て来ない方がいらっしやる。体調であるとかいろいろな状況はあると思いますが、しかし、実際に来た時に逃げるといことを考えなければいけません。ただし、逃げるといってもなかなか自由にならないと思います。

そのところで先ほど津波対策用避難救命艇の話もありました。それから、救命胴衣の話もありました。津波対策用の救命胴衣というのがいくつか開発されています。そのあたりも個人的には一つの手段かなと思います。

先ほどもちょっと出ていましたけれど、避難シェルターというのは湖西市の方で実際に浮かべてみて今回やったという話もあります。

一方で、学校に、子どもたちにライフジャケットを持たせるといったような話も出ています。その学校についての考え方も一つお聞きしたいと思います。

これは教育長にお願いします。

○教育長（藤池清信君） ライフジャケットについては、これはあるに越したことはないと思うわけですが、現在、松崎中学の場合は、地震が来た場合は、避難としては屋上ではなくて、江奈沢の方向ですね。そこへと走るということになっています。実際に測ってみたところ、池の前商店辺りのところまでは3分くらいで行けます。ずっと奥まで行くと6分くらいになりま

すけれど、そのほか、最終的には避難場所が松崎高校を予定していますので、その方がいいと思っています。ただ、松崎小学校につきましては、現在地ですとこれは屋上へ行くしかないと考えております。その辺を今後9月か10月頃、先日県の方から校舎等で今度の津波等に対して、どんな問題があるかという調査に来るということがありまして、下田市だとか、松崎町、西伊豆町もそうだったかな。それから、伊豆市、その時に来たアドバイザーの方の意見等も十分に聞きながら対応を考えていきたいと思っています。

- 5番（高柳孝博君） いま松高に逃げるという話もありました。松高は確か2次避難所になっていると思います。ただし、松高の今まではグラウンドのそばにある体育館、それと龍門館、そこへと避難するという事になっていると思いますが、今回の想定でそのあたりは見直しがあったのかどうか。町長。

担当の方がいいかな。

- 総務課長（金刺英夫君） 松高につきましては、今回の想定では浸水区域に入ってしまうと、そういうことから見直しをしなければいけないというふうな形でとらえています。これは、じゃあ、それをどこにというふうな形はまだ明確ではございませんが、今の本校舎と言いましょ、そちらの方が高台になっておりますので、そちらの方だったらクリアできるだろうと、その辺につきましてはまた県の施設でございますので、協議をする必要があるかと思えます。

- 5番（高柳孝博君） 松高については、ちょっと聞いた話では、生徒は4階の方で、住民は1階の方というような考え方もあるよという話は聞いています。ただし、松高の場合は、ヘリコプターも降りるような形にもなっているわけですね。現在。じゃあ、グラウンドがなくなった時にヘリコプターがどこに降りられるかという話になるわけです。そのあたりは今後検討するという事ですので、しっかりと検討をして欲しいということです。

それでは、時間もありますから、次に、那賀川河口周辺の話ですが、この辺についてはいろんな方が問い合わせもかけていますし、改めてこの詳細をやる気持ちはありませんが、ただ、一つ、やっぱりこれは住民のコンセンサスの問題が一つあって、平成12年頃の時に住民運動が起きて、水門の建設を断念したというような、中断と言うのか、そういったことがあったように認識しているんですが、やはり今後もそれは必要であろうというように先ほど住民との話をしてというような話がありましたので、それは充分機能して、了解が得られたうえでなされるというふうに判断するわけですが、ただ、今回、産業建設課の方で回覧板を回しましたね。それに対してどのような反応があったか、そのあたりは建設課長の方がいいかな。

- 産業建設課長（菊池三郎君） 私どもは委員会の審議内容を早く住民の皆さんにお知らせし

ようというようなことで、回覧を作成して配布したわけでございます。

特に住民からそれについて問い合わせがこちらの方に入ったかどうかというところについては、そういうことは少ない、あまりなかったというような理解をしております。

○5番（高柳孝博君） あまりなかったということですが、再度町長にお聞きしますが、それについて、例えば、説明会みたいなものを今後予定されるのか、庁内で検討されているんでしょうが、その予定があるかどうか。

○町長（齋藤文彦君） 直接説明というのはまだ考えていないわけですが、一応議員の皆さんの了解を得て、区長会の方にもこれを話しまして、一回県の方に水門を造って欲しいということをお願いに行きたいと思っています。そのような結果がどうなるかわかりませんが、そのような後で、もし開くのだったら、そのような会合を開くような形になると思います。

○5番（高柳孝博君） 続いて、役場が被災した時の復旧・復興計画についてであります。一つは、データのバックアップはしているというような話は前にお聞きしているわけですが、データのバックアップだけではなくて、前回お聞きした時には、災害が起きた時には最初に何をやらなければならないかということを知った時には、人命救助だということがあったわけですが、人命救助をやるためには、それだけの人と物と情報がなければいけないわけです。そのあたりのことを初期の時に、少ない人間の時にどうするか、あるいは、本当に集まらなかった時にどうなるのか、あるいは、役場が被災した時に、そういった業務を、応急業務と言うんですか、緊急業務をやるためのスペースの確保であるとか、そういったものを決めておく必要があるんじゃないでしょうか。いかがでしょうか。町長。

○町長（齋藤文彦君） 先ほど申したとおり、災害対策本部は7.9メートルで、最大浸水深がこの内閣府が発表したものによると4.5メートルで災害対策本部はこの被害だと大丈夫かなと感じているわけですが、いろいろオフサイトセンターとかなんとかという話もいろいろあるわけですが、いろいろ考えてみたら、何と言いますかね……。いろいろ話し合う中で、ある専門家の人から、2階にオフサイトルームがあるわけですが、それをその牛原山の方へ持っていけば、このまま災害対策本部でできるよというようなことを話をしましたので、どのくらいのお金がかかるかわかりませんが、オフサイトセンターとか、オフサイトルームの移動とか、そのようなこともいろいろ考えていきたいなと思っています。

ただ、どういう地震・津波等が起こるかわかりませんので、多分、ぼくらが阪神大震災の時に視察に行った時もやっぱり3日間何もできなかったというような感じになると思いますの



で、どのような感じで・・・、私は岩地ですけれども、もし起こったら来られるかどうかはわかりませんので、そのようなことも考えてやっていかなければいかんと思っていまして、いま内部の方でいろいろ勉強しているところでございます。

- 5番（高柳孝博君） 災害があった時の初動態勢については、既にBCPということで作っている市町があります。徳島県も作っていますし、横浜市も作っていますので、そのあたり各課の業務は何を優先するかといったものを検討すべきではないかと思えます。

時間がありませんので、次に、観光客に対する防災対策の取り組みですが、先ほど観光客の帰宅の支援であるとか、情報の発信であるとか、そういったようなことが出ていましたけれど、観光客というのは、住民より情報が少ないわけでありまして、実際には、もうその場にいてどこに逃げたらいいかわかるようにする必要があるわけですね。そういった意味では、詳細な避難ルートというのを作って、ハザードマップには載っていると思うんですが、それらを観光客にもわかるようにしなければいけないと思っています。誘導標識みたいなものをしっかり作って、ここにいた場合の避難路はこっちですよというのをわかるようにする。そういったことが必要ではないかと思えますが、町長、いかがですか。

- 総務課長（金刺英夫君） 避難誘導は確かに大事なことでございまして、それにつきましては、現在、既に予算等でいただきました海拔表示、それから、避難ルートの誘導、これにつきましては、三浦地区を主体に現在進めております。ほとんど三浦地区は終わりました、今後松崎地区をどうするかということですので、今後関係地区の区長さんと相談していきたいと。それから、避難誘導灯もあろうかと思えます。今年度江奈と伊那下神社と、それから、相生堂のところへと設置するような形でお話したかと思えます。こういったこと。

それから、既に設置してありました避難灯と言いましょか、例えば、役場の庁舎の屋上、小学校、総合グラウンド等につきましては、緑色の回転灯を付けまして、その位置の表示を明確にしたというような形で行っております。

これらが観光客の方々にどの程度周知されているかということにつきましては、まだ把握はしておりませんが、そういったことのPRも当然必要になってこようかと思えますので、関係課と協議をしながらそういった点につきましては、進めていきたいと思えます。

- 5番（高柳孝博君） 観光客については、放射能の風評被害もありまして、安心・安全あるいは地震が来るよというような疑心暗鬼になるところもあるわけです。そういった意味では「こういう対策をしているから、松崎町へ来てください」、「安全だから来てください」という積極的にやる必要もあるんじゃないかと思うわけです。そういった時に、観光客にしっかり見え

るもの、ハザードマップも観光客にわかる。そういったものを今度作っていくということが必要ではないかと思えます。

時間がないので、次に行きたいと思えますが、行政に住民参加の仕組みづくりですが、行政に住民を参加させるということは、今度の第5次の総合計画の中でも「一人ひとりが主役となって」ということを基本方針として出されていると思うんですが、そういった意味では、住民と情報の共有が本当に必要ではないかと思えます。情報を発信するだけで住民がわかっていると思ったら、これは少し足りないんじゃないかと思うわけです。広報あるいはホームページであるとか、いろんなメディアあるいはホームページを見ますとメールで問い合わせをしてくださいとか、問い合わせはここですよとかいうのは出されていますけれど、実際にそこでフィードバックがいまあまりないよという話があれば、本当に共有されているかというのはいわからないというところがあると思えます。

だから、もっとほかのいろんな、情報というのは何度も繰り返して知らせるとか、いろんな手段を使ってやるとかしないと、本当に浸透しないものだと思います。そういった点で、今後意見収集をする。例えば、懇談会みたいなこと、そういったことは今後・・・、今まで対話会みたいなものは何もないわけですが、これはやっぱり見えるようにする。行政が見えるようにするという意味でも必要ではないかと考えますが、いかがでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） 9月1日の防災訓練の時に情報連絡員から非常に詳しいデータが出てきまして、今度区長会でも9月1日の防災のことについていろいろな意見が出てくると思えますので、そのようなことをうまくやっていきたいなと思っています。

そして、また、一つは、これは危機管理局の方なんですけれども、まだはっきり日にちは決まったわけではありませんけれども、下田市の旧市街と南伊豆町の弓ヶ浜、松崎町の商店街の3カ所において、危機管理局が中心になって、住民と協力して避難ルートの確認をしたいと、そして、避難タワー等もどこがいいだろうかということをお話し合うような機会があるようですので、このようなことを一緒にやりながら、やっぱり町の皆さんがどのように考えているかというのは、本当の生の声を集めてやっていきたいなと思っています。

○5番（高柳孝博君） 生の声を聞くというのは非常に大事じゃないかと思っています。情報連絡員について情報はある程度取れていると思うんですが、それだけではなくて、双方向の対話というのは、話したことに對して住民がどう取って、それに対してこういうことを聞きたいんだというのは出てくる、発展性があるわけですので、一方的にこうだよということでは・・・、あるいは、情報連絡員が取った情報に対しては必ずフィードバックしてあげるといような

ことが必要だというふうに考えるわけですが、一つは、第5次総合計画策定に向けての住民との対話会は、これはもう前に対話会をやるよという、説明は実際に決定されてからの説明会になるようですが、これはぜひやらなければならないと思っています。

それと、一つは、アンケートの中から何を読み取るかということなんですが、私は非常にこのアンケートの中から今後の方向性というのが非常に私は大事だなと思ったわけでございます。

一つは、今後どのような松崎町になって欲しいかというところで、病院などを、医療機関が充実した町ということが、高齢化に伴ってこういうのは充分出て来るといふふうに考えられるわけです。

一つは、町の中で聞かれるのが、近い所入院するためのベッドが欲しいんだという話をよく聞きます。下田もありますけれど、実際に入院されている方については、自分の洗濯物であるとか、頻繁に家とのやり取りをしたいということが出てくるかと思えます。そういったようなことも含めて、近い所に欲しいと言っているんだと思えますが、一方で、医療のトリレンマというのがあるわけですね。医療の質を高めるということが一つと、医療へのアクセスを良くする。近くにあればいいよ。それに対して、その費用を低く抑えるということがあるわけです。それらについては、どれかを上げるとどれかが影響してくるということで、必ずしもすべてを満足するというのは難しいかと思えますが、そのあたりもしっかりとそのトリレンマに対して町はこのように考えているんだということをしっかりと住民に伝える必要があると思えますが、いかがでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） 私の足りない部分は課長に答えてもらいますけれども、やっぱり医療関係というのは、なかなかお金がかかって難しい面があると思うんですけども、なかなかスムーズにはいかないと思えますけれども、そのようなことも考えていかなければいかんかなと思います。

○企画観光課長（山本 公君） ただいま高柳議員の方からどのような町になって欲しいかということの中で、一番多く望まれているのが、「病院・医療機関の充実した町」であるよというようなことがございました。

その次に、「自然が豊かな町」、「観光が盛んな町」というようなことがありましたので、当然それらのアンケート結果は総合計画の方に反映させていただくということで考えておりますし、先ほどお話のありました懇談会につきましても総合計画の基本計画が出来ていく中で開催をさせていただきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願ひしたいと思

います。

○5番（高柳孝博君） 健康に関しては、国の方は健康寿命ということを言われたわけですね。健康寿命というのは、日本は今、世界でナンバー1くらいのことがあるというふうに出ているわけですが、一方で県の方は、お達者度というのを出しました。最近ですね。お達者度という中で松崎町もわかるようなもの。ちょっと算出の根拠が違うのでそのままとはいかないんですが、お達者度の中でも松崎町は、一つは、男性なんかは平均余命が18.5に対して17.28ということで、これは裏を返すと介護に入る人、介護認定の方、要介護2から5の期間が1年ちょっとだということで、男性は意外と元気に頑張っているという気もするわけです。一方で女性の方は22.87の平均年齢に対して、お達者度が19.88ということですので、若干女性の方が介護になる。もちろん寿命が延びていますので、介護になるのはというのは当然想定はつくわけですが、これは、松崎町は35市町の内の32番ということで、そのあたりが何か一つ要因があるのではないかというふうに思います。

このお達者度というのが、今後の町を進めていく中で結構重要なポイントになるというふうに考えているわけです。畑なんかを見ましても高齢者の方が実際に働いています。そのお達者度の考え方ですが、そのお達者度というのを見ると、県の中で上位になっている人たちは、一つは、農業などの仕事がある人、そういう人は長い。お達者度が高い。それから、もう一つは、3世代同居のところが多いと言われていています。もう一つは、地域交流の活発なところはお達者度が高い。上位のいくつかを見るとそういう傾向にあるということですね。

一つ県の総合健康センターで言っているのは、一つは運動であると、一つは栄養であると、一つは社会参加だと、ここで注目しなければならないのは、先ほどお達者度の中で言ったのは、地域交流の活発というのが出ていました。一方で県の総合健康センターの中では、社会参加ということで、これは同じような多分ニュアンスであろうと思うわけです。そのあたりで私は大事なものはやはりコミュニティ、地域のコミュニティというんですかね、だんだん一人暮らしの人が増えていく、このままでいくと一人暮らしの人が増えていくように思われるわけですが、そのあたりをどのように今後進めていったらいいか、そういう一人暮らしにしてしまえば地域参加もしにくくなる。あるいは社会参加もしにくくなってしまうということはあるのではないかと思います。そのあたりはいかがですか。

○町長（齋藤文彦君） 友達の多い人、趣味の多い人、スポーツをやっている人は医者いらずというような言葉を聞くわけですが、やっぱりこうやって元気でやっている人はいいわけですが、どうしても一人で内向的になっていると非常にうまくないなと思うところ

でございます。

そこで、ある住民の方で地域研究家の船津さんという方がこういうことを言っているんです。「松崎町は活力がないのではなく、潜在化して社会の表面に表れていないということがわかった。言い換えれば、価値観が眠っているということである。活力は顕在化するはずである」、それで、「活力の重要な源泉は自発的な余暇活動にある」と言っているわけですから、やっぱり自分がやろうというような気がないとだめなわけですから、そういう人たちを集めていかなければいかんなどと思っています。

それで、私が全町まるごとふる里自然体験学校というようなことを言っているわけですが、労働人口を増やそうと、それで死ぬまで現役で働いてもらいたいと、それで、学校の先生は町民であると、「おれはこれで年金の一部くらい稼ぐぞ」というようないろいろなそういうことでやっていければ、葉っぱ産業ではないですけど、上勝町のように元気になると思っていますので、そのようなこと頭の中に入れているところでございます。

○5番（高柳孝博君） いまやはり地域活動というのは重要だという認識が、充分町の方も考えているというように取るわけですが、5カ年計画におきましてもいろんな団体あるいは個人もそうでしょうが、ネットワークが大事だと、ネットワークづくりが必要だというふうに謳っているわけですね。これはまだ手段としては、あるいは指標、事業、そういったものは今後作っていくと思われるんですが、そういった時にネットワークを作ると一言に言ってもなかなか難しいことで、そのネットワークをどう作るかということまで踏み込まないと本当の事業に落とせないんじゃないか。あるいは、NPOであるとか、各種団体、そういったものを本当に連携させるということがネットワークの一つだと思うんですが、それをどう作るかというのは、かなりいろんな面で今はなかなか出来ない理由が何かあるんでしょうけれど、そのあたりをどう分析されるか、今後事業計画、実際に指標を作る時に、本当に一人ひとりが主役となってやれる、その中で一つ言っているのが先ほどの医療、社会保障というのは当然高齢者ですので出てきます。その社会保障が、町が良くなっているのか、良くなっていないのかがちゃんとわかる指標がやっぱり必要ではないかと思えます。

それから、もう一つは、先ほどの活性化のため産業であるとか、観光であるとか、そのあたりの目標をきちっと出さないと住民にそれがわからない。今やっていることが本当に効果があるのかどうかわからない。事業をずっと打ってきているわけですね。この10年間、すべてこの地域が一体となった産業が盛んなまちづくりであるとか、健やかな安心に暮らせる福祉のまちづくりとか、これらが思惑どおりにいってれば今の要望の中で出て来ることはないわ

けですので、そのあたりが思惑どおりっていない。それは高齢化があるということもあるでしょうし、一概に施策だけでは出来ない部分はあるかと思いますが、そういった意味で、今後の10年間を進める時に、方針ですね。そのままいけば多分高齢者向けにどういうサービスをしていったらいいか、あるいは、社会保障をどうやっていくかということが非常に今の高齢化率が37パーセントを超えて、もしかするともっと高くなる、そういった時に、どういったことを考えるかという、社会保障の充実というのはウエイトが高くなる可能性があるわけです。ただそれだけですと、次の世代へそのままいけるかという、いけないというふうに考えるわけです。だから、そういった意味では産業の充実とか、観光の充実、そういったものを本当に指標でわかるようなものにしていく、そして、住民にそれを充分お互いが共有して、認識してやっていこうという、一人ひとりがということは、これは結構・・・、一人ひとりということですので、各委員さんがわかっていればよろしい、あるいは区長さんがわかっていればよろしいということではないと思いますので、ぜひ住民すべてのことにうまくできるだけ参加していただく、体調とか、無理な方もいらっしゃるでしょうが、多くの方にそれを知っていただいて、町ぐるみでいこうという、そういう気概を持たなければ町のこの状況では難しいのではないかと思います。そのあたりの考えはいかがでしょうか。

○企画観光課長（山本 公君） 高柳議員から2つのご質問があったかと思いますが。団体のネットワークの関係です。

総合計画においてもやはりこのまちづくりは協働によって進めなければならないというようなことを謳ってございます。

現在、「日本で最も美しい邑」連合への加盟に向けていま準備をしているわけですが、その中でもやはり住民の皆さんと町が協働してやっていかなければならないということがありますので、現在まちづくり委員会の公募をかける予定でおります。それぞれに団体の皆さんが参加していただいて、皆さんで意識を共有していただく、団体の皆さんにおきましては、その各所属している団体に帰っていただいて、思いというんですか、考え方を伝えていただくというようなことで進めてまいりたいと考えております。

それから、指標の関係ですが、第4次総合計画の後期計画においても、目標とする数値を入れて、達成目標というんですかね。そういう形で進めておりますので、今回作ります第5次総合計画におきましても5年後の数値あるいは10年後の数値というようなことの中で、目標値を設定しまして、それに向けて施策、事業を展開していくということで考えております。

○議長（斉藤 重君） 延長しますか。

○5番（高柳孝博君） あと3分で・・・。

○議長（斉藤 重君） まとめてください。

○5番（高柳孝博君） 時間がないのでまとめたいと思います。

基本的には、防災についても5カ年計画についても住民との対話とか住民とのやり取りで作っていくと思います。その中で、一つ、やらなければいけないのは、フィードバックしなければいけないと思うんですね。事業を打った、予算を付けてやったからよしということではなくて、その目標というのを指標で目標としたことが成ったかどうか、それが大事だと思います。予算を付ければ予算の執行率は若干は減るとしても、かなりの高率で執行されるでしょう。しかし、予算を執行したかどうかではなくて、予算を執行したことが、本当の目標に対してどれだけ効いたかどうかというのが重要だと思いますので、今後そのあたりを充分勘案されたうえで、防災計画の見直し、そして、5カ年計画の指標、それから、事業計画、それを作っていく必要があると思っていますので、今後そのように進めていただきたいと思います。

以上で私の質問を終わります。

○議長（斉藤 重君） 以上で高柳孝博君の一般質問を終わります。

（午前11時33分）

---